

プログラム・ノート

柴田克彦

ヴォルフ：イタリア・セレナード ト長調

ドイツ後期ロマン派を代表する歌曲作曲家フーゴ・ヴォルフ(1860～1903)が残した器楽曲の中で、最も有名な1曲。1887年に弦楽四重奏曲として作曲され、1892年に小管弦楽版への編曲がなされた(今回はオリジナルの形での演奏)。南国イタリアへの憧れを表した生気溢れる音楽で、明朗かつ繊細な旋律が複数登場する中に、転調の妙や半音階的手法が盛り込まれている。

シューベルト：弦楽四重奏曲第12番 ハ短調 D. 703「四重奏断章」

ウィーンの歌曲王フランツ・シューベルト(1797～1828)が、1820年に1つの楽章のみ完成した作品。しかしながら創作が充実度を増した時期ならではの傑作と称されている。曲はアレグロ・アッサイ。緊迫感漂う第1主題と歌謡的な第2主題を軸に、転調を重ねながら進行する。なお、第2楽章アンダンテの断片が41小節残されており、今回はそれも演奏される。

トゥリーナ：『闘牛士の祈り』作品34

スペイン国民楽派のホアキン・トゥリーナ(1882～1949)が1925年に作曲した単独の小品。リュート四重奏曲として書かれたが、弦楽四重奏および弦楽合奏用に編曲されて広まった。今回は弦楽四重奏での演奏。曲は、死と隣り合わせの闘牛士の不安と、それゆえの敬虔な祈りを表す、デリケートかつ洗練された音楽だ。

武満 徹：『ランドスケープ I』

日本きっての国際的作曲家、武満徹(1930～96)が、比較的初期の1960年に作曲した弦楽四重奏曲。基本的に5度の響きの連なりで構成されている。作曲者いわく「発想には笙の影響を多く蒙っており、全体を通してノン・ヴィブラートで演奏される。きわだった曲想の変化を求めず、はじまりもおわりもさだかでない『音の河』のようなものを想像していたと思います」(小学館『武満徹全集②』より)。

ブラームス：弦楽六重奏曲第2番 ト長調 作品36 より 第2楽章

ドイツ・ロマン派の大家ヨハネス・ブラームス(1833～97)が残した2つの弦楽六重奏曲は、自身の重層的な持ち味を存分に発揮した作品。1865年に完成された第2番は、結婚寸前で別れたアガーテとの愛の思い出のために書かれたとされている。この第2楽章はト長調で、憂いを帯びたハンガリー風の主部に、長調の急速なトリオが挟まれる。

ショスタコーヴィチ：弦楽八重奏のための2つの小品 作品11

旧ソ連の天才作曲家ドミトリ・ショスタコーヴィチ(1906～75)が、20歳前の1924～25年に作曲した作品。彼の名を知らしめた交響曲第1番と同時期の作だが、それとは違って前衛的な響きが横溢した音楽となっている。シリアスなアダージョ主体の「前奏曲」と、力強く前進するアレグロ主体の「スケルツォ」で構成。

(しばた かつひこ・音楽評論)